

## [特別講演Ⅱ]

## 福井崇蘭館の古医学書

小曾戸 洋

武田科学振興財団杏雨書屋

〔はじめに〕文化財保護法に基づき国宝・重要文化財に指定された医薬書は従来『医心方』『黄帝内経太素』『黄帝内経明堂』『新修本草』『備急千金要方』『外台秘要方』『太平聖恵方』『和剂局方』など書名でいえば十指に満たなかった。ところが令和2年に福井崇蘭館本154点がこれに加わったことは特筆に値するであろう。古医学書が重要文化財の指定を受けるということは国が医学史料の重要性を認めたことであり、医学史研究の大きな推進力となる。本講演の趣意はここにある。

〔経緯〕江戸後期～明治中期に古医書収集で突出した京都の医家福井家の什物は、大正以降、断続的に門外に流出した。演者は平成15年、京都寺町通にあった古美術商・福田元永堂の福田武樹氏から連絡を受け、同年12月9日に福田元永堂の店頭座敷間にて多くは木箱に入った古医書群を実見した。何種類もの輸入阿膠を納めた大型木箱ほか生薬類もあった。福田氏の話ではこれらは先々代が入手したらしい。演者は先に送られた目録を見て福井崇蘭館旧蔵本かと推測したが、当日最初に「吉氏家蔵」印のある元刊本を一瞥した瞬間、福井崇蘭館本であることを確信し、胸が高鳴った。

翌16年3月には福田元永堂から武田科学振興財団杏雨書屋に10余点の古医書が持込まれ、元版『類編図経集註衍義本草』・明版『医方大成』・朝鮮古活字『医林類証集要』・朝鮮古版『世医得効方』を購入した。その後、平成23年まで宋版・元版などの福井崇蘭館本数点が古書市場に現われ、何処かへ流れた。

平成24年には国に154点830冊の福井崇蘭館本の海外輸出申請がなされ、これによってその存在を知った文化庁は事前調査を開始し、演者はこれに協力した。武田科学振興財団もその購入を検討したが、その貴重性を認識した国は輸出規制を掛けた。この措置の結果、国（文化庁）の買上げが決定。協議の結果、11億5千万円を平成26～30年に5分割で購入し、文化財保存施設が完備し医薬書の知識に通じた杏雨書屋に順次寄託されることとなった。演者は平成26年4月と7月に東京国立博物館文化庁分室に通って全点を具に熟覧し、調査報告を文化庁に提出した。平成30年秋には杏雨書屋にて開館40周年記念の特別展示会「福井崇蘭館の秘籍」を開催し、貴重書数十点を世に初公開した。そして令和2年に154点が一括して重要文化財指定となったのである。

〔福井崇蘭館〕京都の名医家福井氏の邸宅は江戸時代までは黒門元誓願寺南にあり、書堂を崇蘭館と称し、楼号を千山万井楼とも称した。明治以降は北区の小松原に移って現在に至っている。初代は楓亭(1725～92)、京都の医家は榕亭(1753～1844)～楝園(1783～1849)～恒斎(1830～1900)と続いた。恒斎は名は貞憲といい、江戸の浅田宗伯と親交があり、宗伯が病気の時はその診療に当たったという。浅田宗伯を治療するとは並の力量とは思えない。榕亭以降の墓は京都二尊院にある。福井氏の大略については前述の「福井崇蘭館の秘籍」の図録冊子に記した。福井楓亭は『崇蘭館試験方』などの著書で漢方界では若干の知名度はあるものの、歴代福井家の事跡についてはこれまで十分な研究報告がなく、今回の崇蘭館本医書群の出現によって端緒についた感がある。今後の進展に期待したい。なお『杏雨』25号(2022.8)の東野・町・瓢野の執筆記事、あるいは本誌68巻3号所収の町「崇蘭館往来一宮廷医福井氏の天保年間の記録一」が参考になる。

〔崇蘭館旧蔵医書〕上述の文化庁所蔵杏雨書屋委託福井崇蘭館本154点830冊の書誌については、『杏雨』増刊号（2019.5）所収の池田寿「福井崇蘭館本に関する覚書」と、文化庁文化財第一課が作成（2020.2）した「福井崇蘭館本医学書目録」とに記載がある。数が多いので紹介しきれないが、宋版には『経史証類備急本草』『方氏編類家蔵集要方』『芝田余居士証論選奇方後集』『統易簡方脈論』『統易簡方論後集』『黎居士簡易方論』、元版には『三因極一病証方論』『太平惠民和劑局方』『諸病源候論』『是齋百一選方』『証類図註本草』『本草衍義』『楊氏家蔵方』『易簡方』『潔古老人註王叔和脈訣』『灸膏盲腧穴法』『医方大成』『山居四要』『孫真人枕上記加減十三方』などがある。現在杏雨書屋ではその図録を企画中である。

杏雨書屋が従来所蔵する崇蘭館旧蔵本には、重要文化財の仁和寺本『黄帝内経太素』『新修本草』（1950購入）、また宋版『外台秘要方』（1951購入）、宋刊元修『聖劑総録』（1952購入）など神田喜一郎を経由して入架したのものがある。古鈔本『頓医抄』のほか、崇蘭館の旧蔵を示す印を持つ書もいくつかある。前述のように平成16年に福田元永堂から購入したものもある。最近では令和3年8月に衆星堂から神田喜一郎旧蔵の『黄帝内経太素』巻3・12・14残巻を購入した。

古書市場に出て他の所蔵に帰したものもある。平成22年6月の大阪古典会には元版『経史証類大観本草』同『類編図経集註衍義本草』が出て、従来考えられないほどの高額で中国に流出し、後者は後日中国書店から色付き線装帙入りの影印本が出た。平成23年秋の東京古典会には元至正14年刊『証類傷寒活人方書』が出たが、落札先はわからない。医書ではないが、令和3年秋の東京古典会には宋版『後漢書』が出た。

福田元永堂を介したもの、神田家を介したものなどルートは別のようにあるが、演者がかつて福田元永堂で目にしたもの、あるいは杏雨書屋に照会され持込まれながら購入を見送ったものには、文化庁購入の154点とは重複せず、いまだ古書市場に現れないものが多い。医薬以外の書、骨董・道具類まで含めればなおさらのこと、質量ともに想像を絶する品があったに違いない。竹田家旧蔵の完揃の宋版『外台秘要方』40巻（嘉永年間に江戸医学館が模写）は明治期に福井崇蘭館の蔵に帰し現存するらしい。もしかすると吉田家旧蔵の完揃本『聖劑総録』200巻（文化13年江戸医学館木活字本の原本）や、あるいは仁和寺本『医心方』の行方不明巻（巻6・14・17・19・20・23・25・27・29・30）や『新修本草』の行方不明巻（巻3・6～11・13・14・16・18・20）なども何処かの蔵に眠っているのではないか。そんな夢を見るこの頃である。